

教育再生実行会議提出資料 T-S No.8

平成25年(2013)6月26日

委員 鈴木 高弘

## 到達度テスト導入に対する意見(第10回会議)

到達度テストについて、反対するものではないが、以下の様な懸念を感じているので、問題点を指摘しておきたい。

### ■懸案事項

#### (1) 極めて難しいテスト開発

到達度テストは、出題内容に基づいた得点管理(難易設定)が求められる。現行のセンター試験ですら、毎年の平均点が大きく変動している中で、テスト開発は困難を極める。

#### (2) 受験インフラ(会場・機器・運営体制)の整備

到達度テストになり受験機会が複数回になっても、受験生は最後まで粘って受験したいと思うため、入試直前に受験者が集中する。このため、1回のテストに数十万人が受験することを想定した受験インフラを整備する必要がある。

#### (3) 学習環境による学力格差の拡大

多くの公立高校は高校3年間で履修を終える進捗となっている。このため、高校2年から到達度テストが受験できるようになると、低学年からの校外学習への依存度が高まる。

また、中高一貫校の「先取り学習」が加速し、学習環境による学力格差が拡大する。

#### (4) 推薦・AO入学者の学力未定着問題

推薦・AO受験者の学力未定着問題は、入試で学力試験がないことと早期の合格発表による学習意欲の低下（学習停止）が要因である。推薦・AO入試に、学力試験を課すだけでは、学力未定着問題は解決しない。

#### (5) 部活動（課外活動）・学校行事への影響

高校2年から到達度テストが受験可能となると受験勉強の早期化と先鋭化が助長され、部活動（課外活動）や学校行事に専念する生徒が大幅に減少する危険性がある。

### ■ 提言

到達度テストⅠ期（高3の11月中旬）と到達度テストⅡ期（高3の1月下旬）の導入

※推薦・AO入試は、Ⅰ期の成績を活用する。また、推薦・AO入試の合格発表を12月以降にする。

※一般入試は、Ⅰ期とⅡ期から高得点の成績を採用する。難関大学においては、生徒を多面的に評価する願書入試を導入する。